

(市史編さんを終えて)

専門委員 荻原克己

特に歴史とは何かと認識もなしに、たまたま市の行政に長く携わつていて戦後の市政の動きを知っていたので、最初は行政資料の收拾などで役に立てるかと市史編纂に参加した。もう故人となった市役所の大先輩から「市史の編纂を大々的に始めたそだが、昭和三九年に甲府市史を出しているからその後だけをまとめればいいのでは」…という電話があった。そのときは、この意見にあまり奇異を感じなかつたが、専門部会に出席の先生方の討論を聞き、過去の市史を読んできて、歴史を編纂するは單なる史実の羅列でなく、編纂の時代の反映、またその視点にあることが運びながら分ってきた。

この前の市史の編纂と比較しても、所得倍増が叫ばれ高度成長の始まつた一九六〇年前半と東西冷戦が消滅しバブル経済の一九九〇年とは過去の歴史を見る市民の目も異なつて来ている。甲府市の過去の市史は行政史であるが、今度は民衆史の視点で編纂を位置付けられた。これだけに今日的テーマを据え新しい視点に立つと以前に市史で取り上げられた周知の史実であつても新鮮な発見が出てくることを知らされた。しかし、所詮は私などは歴史の素人で、他の先生方のようにしつかりした史観とテーマを据えて編纂に携わったかと考へると内心忸怩たるものがある。

私が担当した現代の市政は太平洋戦争の終戦後からであつて、まだ時が余り過ぎていなくていわゆる時間のフィルターを通つていなければ、歴史的評価の定まらない時代であり、また、関係者が多く現存しているだけにその取りまとめ方に難しさを痛感させられた。現

代だから資料は沢山あるかと思つて收拾整理してみると、特に行政関係には上質の資料が乏しかつた。関係部局に資料をたのんでもわずか数年前のものでも廃棄されていた。現在の市の文書保存規程では市史編纂に役立つ文書はほとんど残らない。その上、各部局で印刷発行される行政資料もほとんど收拾保管されていない。このため将来の市史編纂を考えるだけでなく、文書情報管理を見直すことが必要であるまい。

今回の市史編纂で多くの史料が收拾された。これらの保管管理とともに行政公開の為にも市政資料室のようなセクションがほしい。資料・データの整理保管というだけでなくアップ・ツー・データな資料やデータをシステム的に入力され蓄積されて、いつも市政のビッグな情報が過去のものとともに行政執行に市民に提供されるようなシステムをこの機会に発足させてもらいたいものだ。

市史の編纂に参加したお陰で、私が市に勤務した時の市政を改めて通覽し見直す機会を得た。自分の半生を見返すことが出来たような気持ちも一面で感じている。

交ぼうする教育の再確認

専門委員 斎藤左文吾

私の執筆担当は、『通史編第四巻現代』の『戦後の教育』でした。

昭和二十一年（一九四五）終戦直後から今日までの四十五年間は、日本の歴史の中でも、これほど急激な変革や創造の激しかった時期はなかつたと思われる。

政治・経済・社会をはじめ、教育・文化・市民生活など全般にわ

たって、短期間に、根底的な変改革、新しい制度・内容の創生など正に目を見張るものがある。

私の分担した教育制度や内容についても、明治五年（一八七二）にはじまつた近代教育史の歩みのなかで、この戦後教育は、画期的なものであった。

焦土の中から立ち上った当市の学校復興や新教育制度・内容への移行・振興の問題は、単に経過的に推移を継るのみでは、言い表わせないものがある。関係者や一般市民の苦渋やひたすらの熱意努力が、基底にあつたことを忘れてはならない。

戦後教育の特徴的な問題は、本市においても、多くの戦災校舎の復旧の問題であった。それに、昭和二十二年（一九四七）からの新学制の発足とともになう新制小学校・中学校・高等学校への移行問題、それに新制大学の発足などである。又幼稚園・保育所の増設整備もある。

教育制度の変革とともに教育内容の大改革であった。又教育行政面でも教育委員会制度の発足であり、それに学校教育の充実とともに教育の社会化を図る意味で、社会教育・社会体育・社会スポーツ等の飛躍的拡充であった。

戦後の新しい教育制度に伴う、学校教育や社会教育の整備・充実が一段落した昭和五十年に入ると、学校教育でも画一的教育から能力主義、専門教育の充実が叫ばれ、最近市内の私立高校などの対応が注目される。

又生涯教育の充実・生涯学習の機会拡充が唱えられ、市当局や市民の動きも活発化している。

戦後約半世紀に及ぶ当市の教育史を、清水威先生と担当し、漸く

執筆を終えました。今まで、その変革と推移を一部経験的に理解していたと思つていきましたが、実際、時を追つて内容を見て、その変革のスケールの大きさ、内容の豊富さ、そしてその成果を、驚きをもつて再確認したという思いです。

悔いのない終稿

専門委員 坂本徳一

公費を使う行政側の史誌に、反体制側の記録を載せるのは、長い間タブーとされてきました。市民サイドに立つて、十年の歳月をかけて編さんした『甲府市史』には、今まで記録できなかつた事例を自由に書き込むことができました。

同史の近・現代の社会・世相を担当した私も「近代編」では、幸徳秋水の大逆事件に連座した宮下太吉、大正七年八月に起きた甲府の米騒動の顛末、昭和六年のS.M.甲府同好会の手入れなど不況下の市民の間から起きた反政府運動の記録なども掲載することができたことを喜びとしています。

こうした画期的な『甲府市史』の編さん начимから参加させていたとき、伊東壯先生をはじめ各委員の先生方、市史編さん室の高木伸也室長をはじめとする市の職員の皆様のご指導とご協力を仰ぎ、暗中模索で出発した私の執筆分担を大過なく終稿することができました。思い出深い先生方に、この誌上を借りて厚くお礼申し上げます。

私事で恐縮ですが、『甲府市史』と併行して編さんした『赤十字山梨百年のあゆみ』『山梨県新聞販売史』などの史料蒐集の点でも